

日本丁場見聞コラム

万成石の健太が行く No.10



(有)武田石材 (岡山市)

高橋健太

しかしながらその中で、全国の墓石店の方々はさまざまな工夫や努力をなされ、その地域・風土にあった営業をされています。

皆さんは一年間にどのくらいのお墓が建てられているかご存知ですか？ 聞いた話によると、全国で毎年約三十万基のお墓が新たに建てられているそうです。

この数を見るととても多いように感じますが、実は現在、お墓を必要としている方の四〜五人に一人はお墓を建てていないのが現状で、近年叫ばれている「お墓離れ」が進んでいるようです。

さて今回は、岡山県津山市で二月の三〜五日に開催された福力荒神社大祭に行ってきました。このお祭りは昔からの伝統で、毎年旧暦の元日から三日にかけて行われる「旧正月」をお祝いするものです。

なぜこのお祭りを訪れたかというと、この地域の石屋さんがこのお祭りで、独特な営業活動をされていると聞いたからです。

お祭りの際、神社の参道に「り



福力荒神社大祭時の参道と、長尾石材さんの墓石展示のようす

んご飴」や「たい焼き」といった

屋台が並ぶ光景はよく目にすると思いますが、このお祭りでは、墓石を並べた石屋さんが出店しているのです。しかもそれは一軒のみではなく、数軒の石屋さんが出店

しています。

今まで見たことのないとても不思議な光景でしたが、このお祭りでは当然の光景であり、昔からの伝統だそうです。というのも、この地域では旧正月にお墓を建立す

ると縁起が良いといういわれがあり、数多くの人たちがこの旧正月の期間中にお墓を購入されるそうです。

この風習はこの地域特有なもので、同じ岡山県に住んでいる僕も初めて聞くものでした。全国的に見てもとても珍しいものではないかと思えます。

この福力荒神社大祭に三十六年間出店し続けている(有)長尾石材・



長尾専務（右）と筆者。

専務取締役の長尾健一氏にお話を伺いました。

長尾石材さんは、このお祭りに出ている石屋さんの中で、毎年一番大きな規模で出店されています。今年もお墓を三十一基展示されました。しかもこの地域のお墓は尺角サイズが中心で、中には尺一寸角まであり、大きなお墓がズラリと並んでいる姿は、本当に凄い迫力を感じます。



常設のように墓石を展示

巻石（外柵）を組み、飛び石や墓前灯籠まで据えているものもあります。すべてのお墓がきつちりと組まれ、展示を完成させるためには、十日間が必要だそうです。

このようすを見るだけで、長尾石材さんのお墓に対するこだわりと、お祭りへの想いが相当強いものであると感じました。当然それは、来店されたお客さんたちに伝わり、それが信頼へつながっていくのだと思います。

長尾専務によると、昔は期間中三日間で五十基以上のお墓を販売したことがあり、お祭りは一大イベントだったそうです。しかし現在は、ここで主にお墓を売るのではなく、営業活動の一環としてこのお祭りを活用されているのとのことでした。

「ちょっとお墓を見てみよう」という一見のお客さんもたくさんい

て、そういった方々の信頼をお祭りで得ることで、実際にお墓が必要になったときには、お客さんが直接、長尾石材さんへ来店されるそうです。まさにこの地域特有の風習を生かした営業方法だと思います。

一般の方々は、「お墓」を気軽に見る機会は少なく、積極的な営業は、「縁起でもない」と嫌がられることも少なくないと思います。ですから、こうしたお祭りを通して、お墓のことを知っていただくことは、石材業界にとって、とても大切なことだと思います。

「お墓とは何か?」「お墓の大切さ」を訴えていくことに加え、お墓を気軽に見ていただく場を作っていくことも重要なことであり、そうしたことが「お墓離れ」を食い止める一歩になっていくのではないのでしょうか。